



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	イスラームに焦点をあてた社会科学習のあり方：地理的分野・フランスを中心としたヨーロッパを事例として(fulltext)
Author(s)	秋山,寿彦
Citation	国際中等教育研究：東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要(2): 9-20
Issue Date	2009-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/111835">http://hdl.handle.net/2309/111835</a>
Publisher	東京学芸大学附属国際中等教育学校
Rights	

## イスラームに焦点をあてた社会科学習のあり方

地理的分野・フランスを中心としたヨーロッパを事例として

### A Geographical Approach to Islam in Social Studies

A Case Study on Islam Community in French

秋山 寿彦 (Toshihiko Akiyama)

#### 要旨

本稿は、イスラーム及びムスリムをめぐる現代世界の状況に焦点をあて、世界や日本の地域を生徒が動的、相互関連的にとらえていくことをねらいとする地理学習のあり方を実践的に検討することを試みたものである。

また、「移民」、「労働力移動」、「文化摩擦」をイスラーム及びムスリム（イスラム教徒）との関連からキーワードとし、フランスを中心としたヨーロッパ（EU 域内）で起こっている変化と問題へ、生徒が多面的、多角的に接近していくことをめざした学習単元構成に基づく授業事例を報告するものである。

#### はじめに

中学校の地理的分野の学習で、しかも、限られた授業時間数の中で、ヨーロッパを取り上げる際、なぜ、わざわざイスラームに焦点をあてるのか、ヨーロッパという共通する特色で括られる地理的空間を理解していくうえで、もともと、アラビア半島で生まれたイスラームがいったいいかなる意味を有するものかという疑問を提示されることがある。

現在使用されている中学校社会科地理的分野の教科書を見ると、世界の特色ある地域や国として取り上げられている事例は、アメリカ合衆国と中国が中心として位置付けられ、次いでヨーロッパ連合にまともる EU が多く扱われている。発展途上地域で、貧困をはじめとする問題が集約されているアフリカ大陸や中・南アメリカを取り上げている事例は少ない。また、小学校の第6学年で展開される「日本との結びつきの深い世界の国」の事例に関してもほぼ同様の傾向が見られる。

それでは、イスラーム及びイスラーム世界についての取り扱いがどうかといえば、宗教をはじめとする生活文化、石油に代表される資源エネルギー問題との関係から部分的、断片的に取り扱われるに留まっている。

改定された新しい学習指導要領において、世界の諸地域の取り扱いが2ないし3つ程度の地域から量的に拡大され、イスラーム世界の中心となっている西アジア・北アフリカが取り上げられることになるにしても、イスラームだけを切り抜くような地理学習のあり方では、現代世界の成り立ち、変化、特色や地域に生きる人間の姿に迫っていくことは難しい。グローバリゼーションのスピードがこれまで以上に増し、人、モノ、情報、カネの移動や交流が拡大を続ける現代世界を対象とする地理学習では、西アジア・北アフリカを起点とするイスラームがさまざまな地域に与えている影響や問題を複合的、複眼的、動的に読み取ることができるよう学習のあり方を試みていくことがもめられる。

21世紀を迎えた私たちが最初に出会った衝撃的で危機的なできごとが、ベルリンの壁やソ連崩壊にともなう冷戦終結後に、世界の中心となったアメリカ合衆国のニューヨークとワシントンで2001年9月11日に起こった同時多発テロ事件である。映画の一場面を想起させるようなテロを引き起こした犯人たちがムスリム（イスラム教徒）であったことから、イスラームを危険視し、否定的にとらえる見方や考え方が広がった。サミュエル・ハンチントンによる「文明の衝突」をイスラームと単純に結びつけ、イスラームの危険性を強調する傾向もみられた。同時多発テロ後に起きたアフガニスタンとイラクでの 今日まで続く「テロとの戦争」は、未だなお出口が見つからず、イスラームだけに、世界各地で起こっているさまざまな戦争、紛争やテロの原因を安易にもとめようとするとならえ方は依然として残存している。

こうした現在、新しい学習指導要領が、社会科学習において宗教に関する学習にあり方を充実させ、イスラームを取り巻く状況に関する学習を中学校においても取り上げていく方向性を鮮明としている点を重く受け止めたい。

本論では、イスラーム世界と歴史的にも深いかかわりを持ち、第2次世界大戦後の経済的復興と成長を遂げていく過程で労働力不足を解消するために外国人労働者を受け入れ、その多くを旧植民地からのイスラームの移民に依存しつつ、EU にまともな扱いを求めているヨーロッパの今日の姿をフランスを中心として授業実践の試みた意図及びその成果と課題を論じていく。

## 1 本校生徒のイスラームに対するイメージ

2002年以来、東京学芸大学附属大泉中学校と東京学芸大学附属国際中等教育学校の生徒を対象としてイスラームに対するイメージ調査を質問紙法及び面接を組み合わせ継続的に実施している。イスラームについて示された生徒の代表的なイメージを列記する。

- イスラームは、イラクなどでテロや戦争を起こすこととつながっているので危ない感じがして怖い。
- イスラームは、お祈りの回数や断食など決まりがきびしい。
- イスラームは、女性だけにスカーフやベールを身につけるよう決めているので男女平等とはいえない。
- イスラームを信じる人が多くいる地域は、経済的に発展していない。
- 身近な知り合いにイスラームを信じている人がいないからどのような宗教であるかよくわからない。
- イスラームを信じる人の多くが砂漠に住んでいる。
- 私たちが使っている石油の多くがイスラームを信じる人が暮らす地域で産出されている。だから、イスラームの国には大金持ちの王様がいる。

上記のイスラームに対する生徒のイメージは、インターネットが普及し、世界のできごとをテレビを通してほぼ同時にとらえることが可能となった現在でも、これまでのイスラームに対

するステレオタイプといえる危険、非寛容、非民主的、停滞的、排他的、異質性をキーワードとしてまとめることができる。

しかし、帰国生を対象とした調査では、海外生活体験に裏付けられたイスラームに対する異なる意識が表出される。

2003年の調査では、同時多発テロ事件にニューヨークで遭遇し、事件後に学校に在籍していたパキスタン人ムスリム生徒に対する周囲の態度が大きく変化したことに同級生として心を痛めながらも何も力になれなかったのと同時に、イスラームに対する恐怖感をしばらく拭い去ることができなかつたと話す帰国生と出会った。その生徒は、「テロは確かにムスリムが起こしたけれど、すべてのムスリムがテロリストであるわけではないということもわかってはいるのだけれど…」とも言った。

アメリカ合衆国のニューヨークやイギリスのロンドンを中心として現地校に在籍した生徒の多くがムスリム生徒が在籍していたと回答する。しかし、同じ教室で学んではいたが学校以外での付き合いはなく、親しい友人とはいえなかつたとの回答が多い。

ロンドンの公立学校で学んだ生徒にとっては、インド、パキスタン、バングラディシュというイギリスの旧植民地出身の子どもたちと机を並べることは珍しいケースとはいえない。2007年には、トルコ人の同級生の家での誕生会に招かれたことを思い出として語る生徒が見られた。トルコのお菓子や飾りを初めて見て、イギリスの普通の家との違いが鮮明な印象として残っていると話した。2006年には、パリ日本人学校に在籍し、エッフェル塔が自宅から見えるというパリ中心部で生活していた生徒が、パリの町並みがきれいに保存されているというのは、一面にしか過ぎず、アラブ人街を通ると雑然としているとの回答を得た。

2005年には、サウジアラビアのジェッダ日本人学校小学部低学年に在籍し、壁で仕切られた外国人専用のマンションで生活し、スクールバスで通学し、ときどき、母親がアバヤという黒いベールを着用して買い物に出かけていたことを特にはっきりと記憶しているとの回答を得た。

なお、インターナショナルスクールに在籍していた生徒の多くは、ムスリムが在籍していても生活水準が高い階層の家庭の子どもが多く、学校生活を送るなかでは、「自国紹介」等の学校行事のとき以外にイスラームを意識する機会はほとんどなかつたと回答する。

これらの回答を集約すると海外生活体験を有する生徒にとってもイスラームを信じる人々(ムスリム)が何に価値を見出し、どのような生活をしているのかというその日常へと近づいていくことは、決して、簡単なこととはいえない。

このようなイスラームに対するイメージを見るとき、地理的分野の学習で取り上げるさまざまな地域とイスラームとのかかわりを意識した学習計画、及び単元を構成していくことが重要となってくる。

2 『ヨーロッパ連合 (EU) を中心として一つにまとまろうとするヨーロッパ』

① 学習単元構成表

次	学習テーマ	学習内容
第1次 70分 ※イメージ ジョン社 会	ヨーロッパとはどこなのか  ヨーロッパ人とはだれなのか  ヨーロッパ人の心の支えは何か	ヨーロッパの国々の位置・国旗・面積・人口 ヨーロッパの地形<海・川・山脈>とヨーロッパ世界の「国境」<ウラル山脈・ボスポラス海峡・地中海・ジブラルタル海峡> ヨーロッパの民族<アングロサクソン・ゲルマン・スラブ> キリスト教<カトリック・プロテスタント・ギリシア正教・ロシア正教>
第2次 70分	ヨーロッパ人は何を食べているのか	ヨーロッパ人々の食卓<さまざまなパン（小麦・ライ麦）とチーズ、肉（豚肉・牛肉）、ワイン（ぶどう）> 混合農業と地中海式農業 土地利用（畑・水田・牧草地・山林の割合） 食料自給率
第3次 50分	ヨーロッパの都市はどのように作られているのだろうか	海外からの観光客の移動 パリ＝「花の都」の景観保護 再統一され、壁が消えたドイツの首都・ベルリンで進む再開発 パリ（アラブ人街）・ベルリン（トルコ人集住地区）の移民街
第4次 ※事例1 70分	サッカー・フランス代表チームキャプテンを務めたジダン選手の姿から見えてくるフランス	移民とフランスによる植民地支配 労働力移動（外国人労働者） スカーフ着用をめぐる対立
第5次 50分	一つにまとまるヨーロッパ	EU加盟国 人とモノの自由な移動とユーロの誕生（シェンゲン協定とマーストリヒト条約） EUとアメリカ合衆国・日本の経済力比較
第6次 50分	アルザス地方（ストラスブール）で生きる人々 国境とは何か 国際人とはどのような人か	2つの世界大戦とアルザス地方（フランス人からドイツ人、そして、再びフランス人へ） 国境を越えて通勤・通学する人々 アルザス語を守り続ける人
第7次 ※事例2 50分	EUの光と影 EUの拡大は人々に幸せをもたらすのか	EUの東方拡大と域内経済格差 トルコのEU加盟問題

## ② ヨーロッパに対する教材観

明治以後の近代日本人にとってヨーロッパを憧れの対象とされ、長らく発展のモデルとされてきた地域である。旅行代理店の店先にならぶ美しく整えられたパリの町並みなどパンフレットの写真には、歴史と文化の華やかな面が掲載され、いまなお、その名残りが色濃く感じられる。

しかし、2度にわたる世界大戦でヨーロッパは、破壊、混乱、疲弊を経験した。特に、第2次世界大戦後には、アメリカ合衆国とソ連による対立の最前線地域の一つとなった。長く互いに争いを続けてきたヨーロッパの国々は、政治的、経済的な生き残りをかけて、主権国家の枠にとらわれない地域統合の道を選んだ。そこにいたる契機として、ヨーロッパの国々が互いに有していた一定程度の共通の文化的、歴史的、民族的基盤がこれまでの地理的分野の中核的学習内容を形成していた。

西ヨーロッパ地域における戦後の経済の高度成長を考えると、フランスやイギリスにおいては旧植民地の国々であったアルジェリア、インド、パキスタン、バングラディシュから、ドイツにおいてはかつての同盟国であったトルコからの外国人労働者（移民）の存在を無視することはできない。これら外国人労働者（移民）の出身国の多くはイスラーム世界に位置している。単純労働を担うイスラームの外国人労働者が現在のように、定住することをヨーロッパの国々は当初から想定していたわけではない。しかし、約40年が経過し、フランスにしてもドイツ、イギリス、オランダ、デンマークなどでは自国の中にイスラーム世界（地域）が確固たる根を張っている。ヨーロッパにおいては、外国人労働者・移民・イスラームは相互に切り離すことができない存在感を醸し出している。これにともない、EUを中心として結びつきを深めるヨーロッパでは、スカーフ着用やトルコのEU加盟を典型とする「イスラーム問題」が文化的政治的に顕在化することとなった。

EU内部でのさまざまな障壁の撤廃が行なわれ、地域統合が着実に進められていく一方で、フランスやイギリスで生まれ育ったイスラームの第2世代の若者が暴動やテロを引き起こすという事態が生じているヨーロッパの国々では、いつまでたってもムスリムはヨーロッパになじもうとしないという思いを抱き、ムスリムは社会の下層に固定化され将来の希望をヨーロッパで見つけ出すことが難しいという閉塞感を感じるとともに、イスラームこそが生きる希望を与えてくれると感じる。

人口減少が進み始め将来の労働力不足が現実の課題となっている日本でも2008年から世界最大のイスラーム国であるインドネシアからの介護士の受け入れが限定的ではあるが始まった。

ヨーロッパにおけるイスラームに対するまなざしやイスラームとの共生を探る方策のあり方は、国際化や多文化共生を考えていくうえで私たちに示唆を与えてくれると考え、上記の単元構成を行なった。

## ③ 事例1 『サッカー・フランス代表チームのキャプテンを務めたジダン選手の姿から見て来るフランスの姿』（2006年6月15日に授業を実践した。）

<本時の学習目標>

- ・ サッカーワールドカップ、ドイツ大会の開催に関連して、新聞記事や地図帳を活用してヨーロッパに対する興味・関心を広げることができる。

- ・ ビデオや新聞資料、統計を読み解き、フランスを中心としてヨーロッパには多くの移民が生活していることに気づく。
- ・ EU が今日のヨーロッパ地域をまとめていく中心的組織であることを理解するとともに、現在の「豊かなヨーロッパ」を作り上げていくうえで、移民が果たした役割をとらえるとともに、ヨーロッパにおける多文化共生の実態と課題について多面的多角的に考え自分の意見をまとめることができる。

<本時の展開>

	学習内容・教師の指導	主な学習活動・予想される生徒の反応	教材・資料
導入 8 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ヨーロッパについて最近切り抜いた新聞記事を発表する</li> <li>・ ジダンを中心として本時の学習を進めることを告げる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワールドカップドイツ大会</li> <li>・ シンドラー社エレベーター事故</li> <li>・ ヨーロッパは長寿国が多い</li> <li>・ 98年フランス大会で優勝</li> <li>・ カップヌードルのテレビCMに出演</li> <li>・ 今回はフランスのキャプテン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 掛け地図</li> <li>・ 地図帳で、W杯開催都市を確認</li> <li>・ ジダン選手の写真</li> <li>・ 産経新聞 2005年11月22日</li> </ul>
展開 1 30 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ビデオ資料「ジダンが来た道」(NHK・17分に編集)を視聴</li> <li>・ ジダンは、出生地主義を採るフランスの法律に基づくフランス人であることを説明</li> <li>・ フランスをはじめとしてヨーロッパの移民はどこから来ているのだろうか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フランス第2の都市、マルセイユ出身</li> <li>・ 子どものとき団地でサッカー遊び</li> <li>・ 父親はアルジェリアからの移民</li> <li>・ シューズもなかなか買えない貧しい家庭</li> <li>・ フランス代表チームにはセネガルやカリブ海出身の移民系の選手が多くいる</li> <li>・ フランス国内では移民は排斥の動きも見られる</li> <li>・ ジダンの活躍はフランスを一つに結びつけた</li> <li>・ ジダンの父親のようにアルジェリアからきている</li> <li>・ ポルトガルのようにEUの国からも移民が出ている</li> <li>・ 一番目立つのはドイツに来ているトルコ人だ</li> <li>・ だから、トルコはEU加盟を希望しているのかな</li> <li>・ イギリスにはバングラディッシュやパキスタンからの移民が多い。</li> <li>・ アメリカ合衆国は世界最大の「移民の国」だ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 掛け地図でアルジェリアとマルセイユの位置を確認</li> <li>・ 地図帳 「労働力移動」の主題図</li> </ul>

<p>展開 2 25 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランス人（白人）と移民は一つに結びついているのだろうか</li> <li>2005年11月に暴動発生</li> <li>・フランスのイスラーム人口比率及び失業率</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・暴動は犯罪だからどんな理由があっても認められない</li> <li>・移民が差別されているから暴動がおこる</li> <li>・安き賃金で働く移民はフランス経済に貢献している</li> <li>・多くの移民はイスラム教徒でキリスト教徒と対立する</li> <li>・EUの自由な人の移動は、ヨーロッパ人だけのものだ</li> </ul>	<p>資料・「大欧州の苦惱～移民の反乱～」 日本経済新聞（11月22日） 読売新聞（11月9日） 公立学校におけるスカーフ着用問題</p>
<p>まとめ 7分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランスでの移民とフランス人との「共生」「共存」は可能か</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「共生」「共存」をめざしていく努力が大切</li> <li>・努力だけでは問題は解決しない</li> <li>・文化や宗教が違うのだから対立は簡単には収まらない</li> </ul>	

<本時の評価>

- ・フランスを中心としてヨーロッパに対する関心が高まり、新聞スクラップ活動への意欲が高まったか。
- ・フランスで生活する移民が置かれている状況をビデオ・新聞資料・統計から理解することができたか。
- ・フランス社会における「多文化共生」に関する自分の意見を論理的な文章でまとめることができたか。

<外国人労働者・移民・イスラームに対する生徒の反応と認識>

本事例は、東京学芸大学附属大泉中学校第1学年において実践した授業である。

帰国生徒学級においては、ジダン父子とパリ郊外で発生した移民による暴動を取り上げた本時の学習目標に迫っていく展開を試みた場面で、「海外生活の中で、実際に移民を見たことがある」という発言を契機として、それぞれ生徒が自分の経験を振り返り次のような発言を続けた。「ニューヨークで暮らす移民の中には豊かな人もいる。それは、ユダヤ人だ。」  
「僕は、カリフォルニアで暮らしていたけど、ハンバーガーチェーン店のキッチンでは、英語がよくわからないたぶんメキシコからの移民がたくさん働いていたよ。きっと給料は安いと思うんだ。」

「ロンドンの僕の学校には、白人ではなく、インド・パキスタン・バングラディッシュ人の子どもがたくさん同級生にいたから移民がいて当たり前という感じだった。でも、お金持ちのイギリス人が通う私立学校には白人の生徒ばかりだとお父さんが話していた。」

「移民は、アメリカやヨーロッパだけではなくて、私がいた台湾でもお金持ちの家には、フィリピン人のメイドさんが多く働きに来ていた。ども、これは、移民というよりも出稼ぎという感じに近いかも。」

「ヨーロッパでは、移民というよりも家族を単位としてお金をもとめて移動生活するジプシー（ロマ）と呼ばれる人たちをパリなどの大都市で見かけることがあった。彼らの衣服は



汚れていてベルギーからは差別的に扱われていたみたいだ。」

「シンガポールは、とても小さな国だけれどいろいろな人たちが一緒に住んでいるんだ。インド人も中国人も、イスラム教を信じるマレー人も…中国人が一番お金持ちという感じはするけど。」

生徒たち自身が帰国生徒ということで、国境を越えて生活し学び経験したことが、ジダンを手がかりとして噴出した様相を呈した。同時に、移民の存在を自明のものにとらえる感覚を持ちながらも宗教的、文化的に異なる背景もつ人々がこれから同じ国や地域に生きる人間として互いにどう関わり合っていくのかという学習課題に対して、フランスの事例から自分の考えをまとめていくことは時間的な余裕のなさという理由からも十分にはできなかった。

一方、国内の小学校で学習してきた生徒にとっては、フランスをはじめヨーロッパの多くの国にもともとは、その国出身ではない外国人労働者や移民が多くいることに驚くを感じた。極端な考え方をする生徒は、「このままでは、近い将来、ヨーロッパが、ヨーロッパではなくなってしまうかもしれない。」と記述している。

そして、ヨーロッパと比較したとき国際化が急速なスピードで進行しているといわれるけれども、日本の状況とヨーロッパは、大きく異なるとの認識を多くの生徒が得た。しかし、ヨーロッパで生活し学んでいるのにイスラームの移民がなぜこれほど強く、イスラームという宗教にこだわっているのかという点が十分にとらえられなかった。その理由としては、イスラームが日本で考えられるような聖と俗を分離した二元論ではなく、日常の家庭生活や経済活動、刑法も民法も包摂する人間に生き方と社会のあり方のすべてを規定するという点の理解が、中学1年生には難しかったと考えられる。

④ 事例2 『EUの光と影』（2007年6月25日に授業を実践した。）

<本時の目標>

- ・21世紀に入り、東方へと拡大を続ける EU がめざす理想と現実を抱える問題をビデオ資料・新聞資料・統計から具体的にとらえる。
- ・トルコの EU 加盟問題をフランスを中心とするヨーロッパの立場とトルコの立場の両面からとらえる。

	学習内容・教師の指導	主な学習活動・予想される生徒の反応	教材・資料
導入 5分	・ヨーロッパについて最近スクラップした新聞記事を紹介する	・ヨーロッパのチームで活躍する日本人サッカー選手 ・ハイリゲンダムサミット（ドイツ） ・EU首脳会議（ブリュッセル） ・環境に配慮した自然エネルギーや技術	・掛け地図 ・EU首脳会議と欧州憲法（朝日新聞 6月21日） ・「歓喜の歌」と「EU旗」
展開 1	・EUがめざす目標とEU拡大の歩みを確認	・戦争のないヨーロッパ ・経済的に豊かなヨーロッパ ・国境に関係なく自由に移動できるヨーロッパ	・教科書p122～123 ・地図帳P37 ・ルーマニア、ブルガリアのEU加盟（朝日新聞1月4日）

<p>15分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・EUの拡大は人々に豊かさと幸せをもたらしたか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランス、ドイツ、イギリスなどのEUの中心国にはよかった</li> <li>・EU加盟国には最初から経済的な「格差」があった</li> <li>・ルーマニアやブルガリアなどの後から加盟した「小国」ばかり苦勞する。</li> <li>・出稼ぎで家族が離れ離れになるのは幸せではない</li> <li>・出稼ぎ先からの送金で家が新築でき豊かになっている</li> <li>・ルーマニアの農民は、EUに加盟したから農業を続けていけなくなるかもしれない</li> <li>・中国人が人手不足のルーマニアに働きに来るなんてこれからのEUはどうなるのだろうか</li> <li>・競争はEUの域内、域外に関係なく拡大していきそうだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ資料地球特派員 拡大するEU (NHK 衛星第一)</li> <li>・EU域内の労働者の移動が与える経済的影響に関する意識調査</li> <li>・「EU共同体法」(読売新聞2月20日)</li> </ul>
<p>展開 2  15分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨーロッパへ向かう労働力の国際的な移動を調べてみよう</li> <li>・第2次世界大戦直後及び1960年～70年代初頭の経済成長期に西ヨーロッパでは労働力の不足していたことを説明</li> <li>・EUとトルコはどのような関係にあるのだろうか</li> <li>・トルコのEU加盟問題の障害となっている理由を映像資料を視聴し考えてみよう</li> <li>・トルコの立場からEUを見たときに気づいたことを発表する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルーマニアは労働力の送り出し国だけれど矢印がない</li> <li>・トルコからドイツへの矢印が目立つ</li> <li>・フランスへはアルジェリアやモロッコという北アフリカから移動している</li> <li>・中国からは矢印が出ていない</li> <li>・トルコは、ルーマニアやブルガリアよりもずっと前からEUに加盟することを希望している</li> <li>・トルコはアジアの国で、多くのトルコ人はイスラム教を信じている</li> <li>・トルコの国民は、EU加盟に期待を寄せている</li> <li>・アルザス地方の中心となっているストラスブールの人々はトルコのEU加盟に反対している</li> <li>・イスラームに対する差別意識が根強い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地図帳P45 「労働者の移動」</li> <li>・NHK 「クローズアップ 現代」 トルコのEU加盟問題 (2004年12月16日) トルコEU加盟凍結 (2006年12月21日) &lt;約10分&gt;</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨーロッパの歴史と伝統はキリスト教と結びついているから、トルコのEU加盟無理では</li> </ul>	
ま と め 15 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたがトルコ人であつたらEUに加盟しますか。</li> <li>・あなたがフランス人であつたらトルコのEU加盟を認めますか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かな生活を実現するためにはどうしても加盟したい</li> <li>・多くのトルコ人労働者がドイツやフランスにいる現在のつながりを維持できればよい</li> <li>・イスラム教を大切にして、EUには加盟しない</li> <li>・EUの影響力がさらに拡大するから認める</li> <li>・文化が異なりEU内でのもめごとの原因となるから認めない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見記入用のワークシート配布</li> <li>・4人のグループでの話し合い活動</li> <li>・この後のヨーロッパの学習について連絡</li> </ul>

<本時の評価>

- ・拡大を続ける EU が引き起こしている変化をルーマニアを例にしてとらえることができたか。
- ・トルコの EU 加盟問題を手がかりとして、EU のあるべき姿と今後の課題を自分のことばで論理的にまとめることができたか。

<EU の拡大、トルコの EU 加盟問題に伴って生まれた光と影に対する生徒の反応と認識>

本事例は、東京学芸大学附属国際中等教育学校第1学年において実践した授業である。

20世紀までの EU に関する地理学習は、ヨーロッパ各国がそれぞれの国の歴史や伝統、文化を保持しながらも、国家主権の壁を低くして人・カネ・モノの自由な移動を実現し「真のヨーロッパ人」を生み出すというバラ色の側面を中心として学習が進められてきた。それは、生徒たちが生きる日本、中華人民共和国、台湾、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国の現状＝依然として冷戦の構造が維持されている北東アジアと比較してみると、正に、「憧れのヨーロッパ」という明治以来の図式にあてはまるものといえる。

しかし、イスラム世界の一員であるトルコの EU 加盟問題をいわば、合わせ鏡としてヨーロッパの学習に取り入れことで、生徒は、次の意見記述に見られるようにヨーロッパという地域を相対化する視点を獲得する手がかりを得たと考える。

「トルコは、もうサッカーのヨーロッパ選手権に参加しているのに、EU には加盟を希望して40年以上も経つのに全然話し合いが進んでいないといってよいような状態だから、ヨーロッパはずるい。」

「今のような EU の態度だとトルコの方から加盟しませんと言われるようになるのではないか。それは、イスラム教の国々と EU の仲が悪くなることへと発展してしまうかもしれない。」

「EU の範囲の中を自由に移動することができるということは、裏返してみると、EU の

範囲の外との区別をはっきりするというヨーロッパ第一の考え方につながっていく。」

「EU が拡大していくにつれて加盟国の中で生まれた格差を解決していくことは、中国の格差を解決することよりも難しいかもしれない。EU の内さえよければいいという考え方がなれば、将来、EU はアメリカや日本・中国と対立していくことになるかもしれない。」

### 3 東京学芸大学附属国際中等教育学校社会科におけるイスラームの位置づけ (私案)

イスラームに焦点を当てた社会科学習の実践に取り組むきっかけは、筆者が1998年4月から、2001年3月までエジプトアラブ共和国のカイロ日本人学校に勤務したことが大きく影響している。カイロは、イスタンブール、バグダッド、ダマスカスと並ぶイスラーム世界を代表する中心都市である。エジプトといえばピラミッドに代表される古代エジプト文明発祥の地という理解しかなく、イスラームに関する十分な知識をもたないままカイロに赴任し、現代エジプト及びアラブ世界の人々の日常生活や見方・考え方の隅々にまでイスラームが深く結びついていることに多少の違和感と大きな驚きを覚えた。そして、帰国の半年後に、テレビ画面を通してイスラームを唱える同時多発テロ事件を目撃した。それ以来、日本では決して身近であるとは言えないイスラームを取り上げることで地域、歴史、現代の日本と世界に対する理解を深めていく社会科学習のあり方を模索し続けている。

2007年4月に開校した東京学芸大学国際中等教育学校の社会科カリキュラムでは、第1学年においては地理的分野の学習・「基礎地理」を取り扱う。本実践事例以外に、イスラームに焦点を当てた地理学習として、東京で尋ねる世界の「食」～イスラーム世界との関連からエジプト・シリア・ペルシャ・モロッコレストランフィールドワーク～に2007年12月に取り組んだ。また、2006年1月には、国際都市・東京の学習において日本で暮らすムスリムとの出会い～大塚モスクのハルーンさんへのインタビュー～の実践を試みた。今後は、エジプトに関する学習単元を設定することと中国の学習において新疆ウイグル自治区に暮らすムスリム及び清真寺の学習及びアメリカで増加するムスリムの学習を基礎地理の指導計画に位置づけていくことを検討している。

第2学年での歴史的分野の学習・「基礎歴史」では、2008年の第1回公開研究会での公開授業で、イスラーム世界の拡大をテーマとした「アラビアンナイト（千夜一夜物語）を読み解く」の学習に取り組んだ。中学校の歴史学習においては、現行の学習指導要領では、世界の歴史に関する学習内容が薄くなっているが、「ムハンマドとイスラームの誕生」「十字軍とサラハ・アッディーン」の学習も取り入れている。

公民的分野の学習は、「現代総合社会」として第3学年・第4学年で実施を予定している。そこでは、金融に関する学習として「利息のない銀行、イスラミックバンク」（2001年6月カイロ日本人学校で試行）及び現代世界の紛争と平和の実現の学習として「パレスチナ問題の解決に向けて日本で暮らす私たちにできること」を計画している。

【参考文献】

- 林 邦夫 藤井健志 小林春夫 「社会科教育におけるイスラム」  
東京学芸大学連合学校教育学研究科報告書 2007年
- 内藤正典 「ヨーロッパとイスラム 共生は可能か」 岩波書店 2004年
- 内藤正典 「激動のトルコ 9・11以後のイスラムとヨーロッパ」  
明石書店 2008年
- 板垣雄三 「イスラム誤認 衝突から対話へ」 岩波書店 2003年
- 池内 恵 「イスラム世界の論じ方」 中央公論新社 2008年
- エマニュエル・ドット、エセフ・クルバージュ 「文明の接近 イスラム vs 西洋の虚構」  
藤原書店 2008年

### **A Geographical Approach to Islam in Social Studies**

#### **A Case Study on Islam Community in French**

Focusing on various aspects related to Islam and Muslims in the modern world, this article proposes a practical approach to the studying of geography aimed at encouraging students to gain a dynamic and interrelated perspective at the global, national and regional levels.

It also reports cases of teaching based on a unit structure designed to provide students with a multifaceted and multilateral approach to changes and issues emerging in France and other European countries (European Union), using keywords related to Islam and Muslims such as “immigrants,” “labour force mobility” and “cultural friction.”